中学校における学級通信発行の実践と紙面内容試論 †

平野　秀雄＊・丸山　剛史＊＊
栃木県茂木町立中川中学校＊
宇都宮大学教育学部＊＊

概要　本稿は、栃木県内の公立中学校における学級経営、学習・生活集団づくり活動の一環としての学級通信発行に関する教育実践報告である。本稿では、1986年から勤務校において継続的に学級通信を発行してきた平野秀雄が学級通信発行の経緯、学級通信の内容ないしは紙面構成の留意点、生徒・保護者の反応に関して記した。平野の取り組みは、保護者の要望に押されるかたちで始まったものであったが、結果的には生徒の中学校生活にも役立ち、卒業生からも評価されるものとなっていた。

キーワード：　学級通信，中学校，学級経営，生徒・保護者との対話，保護者との協同

１　はじめに

本稿は、栃木県内の公立中学校数学科担当教諭・平野秀雄氏の四半世紀以上にわたる学級通信発行に関する教育実践報告である（学年通信も含む）。

「学級通信」は、定まった定義があるわけではないが、学級担任が学級経営のために学校・教師の教育活動、子どもの状況、家庭への連絡事項等を記した印刷物であり、「教育学の理論や教育政策に導かれて生まれたものではなく、教師たちの日常の創造的な教育実践上の必要から生まれ、次第に定着してきたもの」ということでは共通理解が成り立つ[1]。ただし、その形態に関して、学級担任が月刊、週刊、日刊で発行する紙数の少ない印刷物をさすと狭義に捉える場合と、学級で発行される通信物全般をさすと広義に捉える場合があり見解が分かれる。

近年、教育の私事化が進行するなか、教師・保護者間の対話を成立させ、教育の公共性再構築の可能性をもつ教育実践として学級通信が着目されるようになっている[2]。

筆者（丸山）は偶然、平野氏が長く学級通信を発行し続けてきたことを知った。平野は1986年の教員就職間もない時期から現在まで継続的に学級通信を発行し続けてきた。その期間は四半世紀以上に及ぶ。

† Hideo HIRANO*, Tsuyoshi MARUYAMA**: An educational practice report of classroom newsletters issue in junior high schools and an essay in the contents

* Nakagawa Junior High School, Motegi
** Faculty of Education, Utsunomiya University

平野と同様に学級通信を継続して発行する教師はいないわけではないと思うが、四半世紀以上となると多くはなく、貴重な取り組みであると思われる。

また、平野の学級通信に対しては生徒、卒業生、保護者によりその意義が語られ、生徒及び保護者に響く教育活動となっており、重要な取り組みであると考える。

そこで、本稿では、教育実践報告として平野氏に学級通信発行の経緯、学級通信の内容ないしは紙面構成の留意点、生徒・保護者の反応に関してまとめてもらうこととした。「個人情報保護」言説の広まりなどもあり、学級通信を発行しにくい状況もあるようであるが、学級通信は子どもを励まし、保護者と協同するための手段として有意義であると考える。特に家庭での会話が減る中学生の時期には効果的であるとも考える。後進の方々の参考になれば、われわれにとっては望外の幸いである。

２　学級通信発行の経緯

「ただいま！」「おかえり。」「お腹空いた！」「すぐ夕食だよ。」このような親子の会話が響く家庭はどれくらいあるだろうか。次のような保護者の声をよく耳にした。「中学生になったら、めっきり口数が減って…。学校のことが少しもわからなくて。小学生の頃は何でもよく話してくれたんですよ。」

筆者（平野）が中学校で学級（学年）通信発行を本格的に始めたのは、このような保護者の声に押されたことが一つの契機になっている。中学生になり、

部活動が始まり、家庭で過ごす時間は急に少なくなる。思春期とも重なり、親子の会話は減るばかりである。このような状況のなか、ベテラン教師の実践に学び「学級通信」を書いてみた。学級通信のタイトルは『がんばろう』と名づけた。当時はまだ二十代の駆け出しの教員であり、深い内容の通信など書けるわけもなく、とにかく１枚書いて、「創刊号」と記して発行した。しかし、意外にも反響があった。

学級通信・学年通信発行のポイント

通信活動は学校と家庭を結ぶ役割を果たすばかりでなく、学級・学年を支える重要な教育活動である。学校教育は組織活動でもあるから、通信は、学級・学年の両方が必要である。学級通信は担任の学級づくりの取組として重要な役割を担う。学年通信に関しては、中学校においては学年が重要な単位であり、教育活動を学級単位だけで進めていこうとすると、学級での実践の限界や学級間の矛盾を生じさせてしまうこともある。こうした問題を解消するためにも学年通信が重要な役割を果たす。

生徒、保護者、教師が、現状を踏まえた上で「今、どんなことに取り組めばよいのか」について共通認識をもつことが必要になり、そのための有効な方法の一つが通信活動である。学級・学年通信を発行する際には、次の点が重要であると考える。

（１）生徒の分析や思春期の解説も含めて、現状や実態を知らせていく。
（２）到達目標は何かを示し、実態を変えるための具体的な方法を提起していく。
（３）目標に対する到達度を知らせ、総括していく。

教師の仕事は際限がなく、近年は特に提出書類が多く、現場の多忙化に拍車をかけている。通信活動は物理的に時間の負担と実務的な負担が大きいだけに、その意義について明確な考えをもたないと長続きしない。しかし、通信活動は続けないと効果は見えてこない。だからこそ、学級担任一人の力に頼るのでなく、学年集団が目的を共有し、共同体として通信活動を実践していくことが求められる。

通信活動を学年で取り組むにあたってのポイントをあげれば、次のようなことが考えられる。

（１）通信で現状や実態を知らせるために、常にメモ帳などを持ち歩き、記事になるようなことをメモを取る。これによって、生徒たちの姿を教師がよく見るようになり、生徒の分析にも役立つ。
（２）視覚的に訴える意味で、写真の掲載は有効である。できる限り多くの生徒が平等に登場するように名簿等に記録しておく。
（３）学年で一致した到達目標を示すとともに、結果も分析し掲載する。プラス面から学ぶことも多いが、場合によってはマイナス面も掲載し、実態を変える具体的な方法を提起できるようにする。
（４）内容によっては連載という方法をとる。話題が途切れない方が有効な場合は、できる限り毎日発行する。
（５）生徒たちの実態の分析から、目標がどこまで到達できたかを知らせる。
（６）帰りの会で読み合わせをする。配付直後、通信に読み耽る教室の静けさは何とも言えない感動である。
（７）中学生に必要な社会的ニュースは、コラムとして掲載する。
（８）学年教師集団のみならず、教科担任、部活動顧問とも連携し、生徒たちの姿、現状を多面的に把握しておく。
（10）１枚の通信づくりに、時間をかけすぎない。

３　学年別・月別学級通信づくりのポイント

３－１　中学校第１学年の通信

４月　生徒が新しい中学校生活への期待と不安で胸を時めかせているときである。これから始まる３年間は人生で最も変化の多い時期で、大人への成長の出発点となるだけに、教師側にもしっかりとした心構えをもってほしいという願いがある。

しかし、入学を前に様々な情報を耳にして、不安を煽ってしまう場合もある。このような状況下で４月に渡される通信は、新入生とその保護者に大きな影響を与える。この時期の通信づくりのポイントとして次のことがあげられる。

（１）新入生を迎えた担任教師、学年担当教師の思い、願いを言葉として贈る。
（２）安心して中学校生活が送れるという明るい心、期待する心をプレゼントする。
（３）クラスメイトは新入生にとっても保護者にとっても大きな関心事である。生徒たちの姿を具体的に伝えるとともに生徒名前を多く登場させる。
（４）必要に応じて「中学生になって」の作文を掲載し、初心を胸に刻ませる。

５月　様々な行事が次々と展開され、しかも中学

校においては最下級生として緊張した生活が続く。その疲れが一気に出る時期である。私語を始めたり忘れ物をしたり、中学校の授業に適応していけない生徒も出てくる。本格的に開始される部活では、所属を決めかねている生徒や参加の有無がはっきりしない生徒も現れ、学習と部活との両立の問題が家庭訪問で話題になる。通信では、このような実態を変える具体的な方法を提起したい。

（1）学びへの取組体制を確立させるため家庭学習の仕方などを具体的に示し、特に、初めての中間テストへ向けての絶好の機会とする。

（2）忘れ物はしない方がよいが、生徒の非を責めないようにする。むしろ大切なのは、困った時にどう対応するか、忘れた時にどうするか、という危機管理がより重要である。好んで忘れ物をする生徒はいない。忘れたら、もし困った時には、という危機管理の発想を大切にし、問題提起したい。

（3）希望と不安の大きい部活動について、その考え方や意義について伝えていくと同時に、生徒たちの様子や声を伝える。そこから、学習と部活動との両立を図るためのポイントが見えてくる。

（4）家庭訪問の意義、担任や学年、学校の考えを的確に伝えるが、実際の家庭訪問では「聴き合う関係」を築くことが重要であることを伝えたい。

5～6月　中学校で初めて定期（中間）テストを迎え、そのテストの重みや緊張感を経験する。「学び」とはどうあるべきか、テストの復習はどうすべきか、学習習慣の確立を目指して具体的に目標を示し、家庭内で話し合うチャンスをもたせてあげたい。テストの平均点の掲載は無意味である。入学して2ヵ月、教師集団として、生徒たちの本当の姿が見え始める頃である。到達目標にどれくらい達成できたかの評価は、保護者としても気になるところで、読みたくなる内容である。

（1）中間テストへ向けての学習法の共有、取組方、教科担任からのアドバイス等を連載し学年全体で中間テストの総括をしていく。

（2）雨天時の教室内での過ごし方から、生徒たちの様子が窺える。耳を澄ませると、生徒たちのメッセージが聞こえてくる。

7月　今後の3年間の中学校生活を見通させ充実させる意味で、しっかりと総括させたい。また、中学生として初めて手にする通知表、初めて迎える夏休み。これらを睨んだ通信の内容を考える。話題は豊富にあるが、終業式まで期間が短く内容の精選が求められる。

（1）1学期の反省として、自分自身で評価をする生徒用通知表を作成し公開していく。生徒によってものの見方や考え方は異なり、評価も変わってくることを認識させたい。

（2）1学期の読書記録を振り返り、夏休みに読むお薦めの本を紹介し合う。

（3）到達目標に達成できたか、どれほど近づいたかを検証させる一つの評価が通知表であり、絶対的なものではないこと、これがすべてではないことを保護者にも理解していただく。

（4）夏休み中の部活動について、アドバイスする。

8月　「えっ！　8月に通信発行？」と思われるかもしれない。登校日や学習会、諸行事に集まる機会を利用して、乱れがちな生活に警鐘を鳴らすことは必要である。2学期への生活へとスムーズにつないでいきたいと思う教師集団の熱意が伝わるだけでも大きい。暑中見舞いを兼ねて「ハガキ通信」を郵送するのも面白い。

また、夏は戦争と平和についても深く考えさせたい。原爆や戦争に関する情報（TVドラマや特集番組、映画等）をうまく取り入れ、社会問題へ目を向け視野を広げるチャンスでもある。

9月　2学期始業式の1年生は見違えるほど心も体も成長し、すっかり中学生の顔になっていることが多い。保護者も教師もこの変化に気付き、それをよく認識した上で生徒理解に努めねばならない。友人や先輩との関係から問題行動も出始める時期である。運動会を利用して学年の協力、クラスの連帯意識を高揚させたい。学習内容も高度になってくる時期である。小学校とは違った授業の変化について、生徒たちや保護者に十分理解させる必要がある。

（1）保護者の信頼を得るのは、立派な言葉を並べてもダメである。生徒たちの姿を見てもらうのが一番である。このことを教師集団が共通理解し、動会はこの信頼を得るための機会である。しかし、運動会等の行事は思い通りにいかない難しさもある。完成品を見せる場と考えないようにし、生徒たちと教師集団がともに運動会を創りあげていく学びの場であると考える。ハプニングも含めて、全体を楽しむことを大切にしたい。

（2）夏休みの宿題（課題）を忘れる。もしくは、やっていない、手をつけていない等の問題が出てく

る。忘れたらどうするか。手をつけてなければどうするか。ここでこそ危機管理の学習をさせたい。

（3）学習内容がどのように高度になってきたか、どこが難しいのか。教科担任の協力を得ながら、具体的で適切な教科別アドバイスが必要である。

10月　部活動も軌道に乗り、新人戦に出場する生徒も出てくる。中間テストの準備や文化祭（学校祭）、合唱コンクールへ向けてクラスを盛り上げる取組も大切である。読書の秋でもある。一方では、どれにも無関心で意欲のない生徒も目に付くようになる。このようなときこそ、通信活動の威力を発揮したい。

（1）公式戦である新人戦へ向けて部活に夢中になる一方、緊張感も抱える。選手であってもなくても気持ちはみな同じである。そうした思いを共有させたい。

（2）学習と部活動をいかに両立させるか、その取組を考えさせたい。教師側の体験談ばかりでなく、友達や先輩の例もあげてみる。

（3）クラスや学年での行事（レクリエーション）の企画や合唱コンクールのリハーサルなどを通して、学年全体の雰囲気を盛り上げる。保護者に呼びかけて見に来てもらうのも面白い。

11月　退廃的な雰囲気が漂う時期でもある。11月は文化祭（学校祭）や祝日（＝文化の日）を通して「文化」について考えさせる機会でもある。また、入学当時の新鮮な意欲も薄れ、目標もなくその日暮らしの生活になりがちな時期でもある。

（1）合唱練習において喧嘩などトラブルはつきものである。その中で、生命の否定にかかるような言動は許してはならない。一つの生命の誕生に「どれだけ多くの人たちが関わっているのか」、「どれだけ多くの生命のバトンが渡っているのか」を考えさせたい。

（2）文化について話し合い、学んだことを共有していく。

（3）「学ぶ」とは何かを考えさせ、期末テストの学習計画に生かしていく。

12月　入学以来の反省を一つの区切りとして振り返らせるのが12月である。どんな到達目標をもち、どこまで到達できたかを確認し、自己評価させたい。これは、教師集団自身の取組の反省にもなる。また、教育相談（個人面談等）での話題から、保護者や生徒の思いに寄り添うようにしたい。

（1）入学以来の生活を振り返り、各々の到達度、クラスの到達度、学年の到達度をそれぞれ評価していく。

（2）教育相談前に、家庭で何を話し合っておくか、どんな話合いにしたいか、学年の考えをしっかり整理した上で伝える。また、相談結果から共有できる問題を明らかにし、初めての冬休みを有意義に過ごさせたい。

1月　「今年は2年生になる！」このような新鮮な気持ちが芽生え、気持ちを新たにする1月。身も心も引き締まった思いで始業式に臨む。それぞれの正月の迎え方や風習、年賀状の話題等、紙面づくりには事欠かない。「1年の計は元旦にあり」の意味とともに、しっかりと新年の抱負も書かせたい。

（1）抱負を書かせる前に、「今までの実態を変えるために実態から学ぶ」ことを指導する。入学以降の学習活動での到達点を振り返った上で、実態を分析させ、各自の方針をもたせたい。

（2）班活動等を利用し、それぞれの正月の過ごし方（食事、遊び、習慣、挨拶等）を話合い、まとめさせる。地域による違いなど、正月の文化を学ぶ。

2月　最後の定期テストに臨み、1年生の学習活動の総括として取り組ませることにより、取り組み方に差が出る。到達目標に対して、どれだけ達成できたかを確認し、1年生の学習内容の総復習に取り組ませる。一方で、異性に興味を抱き年齢でもあり、マスコミに踊らされる生徒も多い。バレンタインデーって、本当は何なのか、考えさせたい。

（1）1年間で学んだことを教科ごとに整理する。また、学年全体としてどのような「学び」をしてきたかをまとめる。

（2）保護者はどのように出会い、なぜ結婚したのかなど、身近な話題から男女交際について考えを深めさせる。

3月　中学校1年での「学び」をどう総括するか、締めくくりの3月にふさわしい取組をしたい。1年間の思い出を学級文集にまとめるのもよいし、学級通信をまとめて製本することも考えられる。教師集団も生徒たちは1年間をどう捉えているかを分析しておく。なぜなら、今後どのような実践をすべきかという共通認識が必要だからである。

（1）学級文集作成実行委員会がどんな活動をしているか、学級文集にはどんな内容が相応しいか、学級文集は学年で取り組んできた文化活動の総決算の一つであることを、生徒たちに認識させる。

修業式に配付できるようスケジュールを明らかにし、目標をもって活動することが大切である。
（2）生徒たちの関心は進級時のクラス替えにある。クラス替えの意味を生徒や保護者に的確に伝える。
（3）生徒一人一人に、担任からの励ましのメッセージを伝える。

3－2　中学校第２学年の通信

4月　１年生が入学し、何かしら大人になったような気がする時期である。実際に心身ともに大きく変わる時期である。ただし、生徒は中学校生活に慣れたものの、クラス替えもあり、はやり不安をもって進級する。その気持ちは保護者も同じである。第２学年はまだ進路に関する緊張感がなく、荒れやすいと言われる。このような時こそ、上級生になった自覚を促すとともに、生徒たちの背景にいる保護者と信頼関係を強くするための通信が不可欠である。
（1）１年生を迎える心構えをもたせるとともに、リーダーとしての指導を強化する。
（2）朝の読書（または朝自習）→授業→家庭学習といった基本的な学習体制を早期に確立させる。学習に力を入れようとする新たな決意をもたせ、持続させたい。
（3）部活でも学習面でも、一人一人に目標をもたせ、それを確認し合う。

5月　５月になると「中だるみの２年生」などと揶揄され、この２年がうまく乗り越えられれば３年になってもうまくいくという俗説がある。これは必ずしも正しくない。実際には、大型連休を境に交友関係が変化し非行・問題行動を起こすこともある。進路決定までに時間があるためか保護者会の出席率も低い。しかし、保護者の関心は高い。生徒を愛おしく思う気持ちは保護者と教師で共有したい。
（1）家庭訪問や保護者会等を通して生徒への願いや思いを率直に取り上げ、不安感を安心感に転換する契機をつくる。
（2）通信は単なる「お知らせ」ではない。連休中の有意義な過ごし方を伝えるだけでは効果は見えない。祝日の意味や道路の渋滞の実態、地域の行事等、社会へと目を向けさせるチャンスである。

6月　いわゆる「だれる６月」である。要因には季節的な不快感もある。しかし、それ以上に目標が不鮮明になりやすいことがあげられる。新鮮味が失われ、問題行動や事故もよく起こる。教師は日記やつぶやきに注意し、生徒たちの心の変化を把握しておきたい。
（1）生徒たちの悩みや不安を共有し合う。恋愛問題といえどもタブー視しないで取り上げたい。
（2）保護者と協力、共同する。マンガやテレビ、ゲームと学習の関係、長電話、携帯、異性との関係等、機会を捉えて保護者に語りかけ、同時にヒントをいただく。

7月　運動部では３年生が引退し、２年生にとっては成長の節目になる。しかし、この時期の２年生は「目標に対する意欲付けの難しさ」、「仲間関係の分裂や学習の取組状況の差の拡大」、「周囲の目（大人、特に親）の抜け」等があり、最も指導が難しい。教師集団の中では問題を抱える生徒たちが見えてくる。夏休みに家庭内の対話、担任や教師集団との交流がいかに図れるか、大切な時期である。
（1）１学期の生活、定期テストの総括をさせ、夏休みの自己課題、目標を明確にさせる。
（2）運動部においては夏休み中にリーダーとして活動することを踏まえ、「リーダーとは何か」、「尊敬される先輩とはどんな人か」を考えさせ、学年全体で確認する。
（3）家庭の協力を得て「夏休みにしかできないこと」を決め、到達目標を明確にする。

9月　運動部員は、夏休み中に中心的役割を期待されるようになり、リーダーシップを発揮せねばならなくなる。その反面、いわゆる先輩風を吹かせ、問題を起こすこともある。これは人間関係を深く学ばせる何よりのチャンスである。「中だるみ現象」と合わせて、通信の威力を発揮するときである。
（1）いじめや人権無視、ハンディをもつ生徒や弱者への差別や偏見などについて、率直な意見や疑問を出し合い、取り上げていく。人間のもつ弱さ、人間関係の難しさなどを学ばせる機会である。
（2）運動会、新人戦へ積極的に取り組める生徒と、そうでない生徒の二極化現象が現れる。相互に理解し、共感し合える関係を築かせたい。

9～10 月　２年生が主人公となる部活動の新人戦が開催される。意欲と緊張感が高まる時期でもある。部活と学習との両立の問題もある。時間をいかに有効に使うか、適切なアドバイスが不可欠になる。

生徒会では３年生と文化祭（学校祭）を創りあげていく主体とならねばならない。一方で、投げやりな態度を見せる生徒も現れる。教師は生徒たちの内面

に共感しつつ寄り添う必要がある。

（1）自信をもって新人戦に臨めるよう今までの努力をお互いに評価・確認し合い、実力が発揮できるよう励ます。１年生との微妙な関係にどう対応していくかも考えさせたい。

（2）「両立」って何か。何をどうすればいいのか具体的に考えさせたい。その上で、多様な考えを共有させたい。

（3）各自の生活を振り返らせたり、自己を見つめさせたりする大切な時期である。そのために、読み聞かせや良書の紹介など、読書指導を保護者の協力も得ながら実践していく。

11 月　男子は変声期で合唱コンクールでは声を出したがらず、しばしば女子とトラブルを起こす。このトラブルを性の指導や学級づくりに生かしたい。また、職場体験学習等の進路学習で学んだことを総合的に話し合わせ、将来、職業、働くことの意味など、生き方について保護者とともに考えさせたい。

（1）トラブルの原因、男女の性の違いなどを話し合わせ、問題点を共有し整理する。学習内容によって「思春期教室」を養護教諭とティーム・ティーチングで授業を行う。保護者参観も呼びかける。

（2）保護者（両親、祖父母、兄姉、叔父叔母等）の協力で「職業紹介」（職業の内容、必要な技術や資格、やりがいと苦労等）をしてもらい、保護者も交えて進路について学ぶ。

12 月　冬休みを控え、12 月は非行や問題行動を起こしやすい。教育相談の意義を学年としてしっかり伝え、保護者との協力体制をつくると共に、生徒たちの揺れる心に寄り添い、生徒の気持ちに共感できるような感性をもちたい。また、各々の十大ニュースを作らせ、身近な問題から社会問題をみられるような視点をもたせたい。

（1）中学校生活の折り返し地点で２学期を振り返り、どう捉え、その歩みを生徒、保護者それぞれの視点から綴りたい。１年半の足跡を振り返ることは、自分さがしのための軌跡になり、自分の成長を自覚させることにもなる。

（2）テレビや新聞では報道しない、自分の十大ニュースを考える。学校のことだけに限ると堅苦しくなるので、地域や家庭からも選び、クラスや学年で共有していくと面白いものになる。

1月　受験を意識するようになる。それに追い打ちをかける言葉は必要ない。学力をどう高め、生活や健康に対する自覚をどうもたせ、立志式へ向けてどう夢や希望を語るか、それらを実現するための努力とは何かを考えさせる必要がある。

（1）教師集団が生徒の実態をしっかり掴んだ上で、今、何をめざして進級するかを考えさせ、家庭で共に考えていけるような指針を提供する。

（2）テレビの視聴時間が長くなり、生活リズムが狂う時期でもある。学習・生活習慣を見つめ直させ、発達段階を踏まえたアドバイスが必要となる。

2月　立志式へ向けて「立志の作文」を自発的に書くようになるためにどうするか。14 歳がどんな年齢であるのか調べ、話合い、なぜ立志式があるのか考えさせたい。

（1）立志の作文（または誓い）を学年全体で共有化する。それを通信と文集づくりの両面から考える。14 歳の意味を知り、同世代の意見や考え方を共有させたい。ものの見方や考え方、価値観は多様であることも理解させたい。

（2）人間の魅力とは何か、異性に興味・関心を抱くのはなぜか、恋愛とはどのような感情なのか。避けて通れない思春期の課題に、教師は真剣に向き合う必要がある。この問題では、教師集団の教育論に基づき協力して行われなければならない。

3月　２年生の目に高校入試や卒業式はどう映るのか。１年後の自分たちの姿と重ね合わせながら考えさせる。学習活動での成長、部活動や生徒会活動でのリーダーシップを評価し、どの生徒にも伸びる可能性があることを気付かせ自信をもたせたい。３年生になる自覚を高めるには保護者の協力も大切になる。

（1）３年生の入試、進路状況の客観的なデータを示しながら、３年生はどのような学習活動をし、どのような思いで受験に立ち向かってきたかを認識させる。それが卒業式の準備をする２年生の自覚につながり、感謝の心で３年生を送り出せるようになる。

（2）最上級生になるという自覚を促し、家庭へも協力を呼びかける。この時期は生徒たちも保護者も少なからず不安を抱く。教師集団で共通理解をはかりながら、適切なアドバイスを行っていく。

３－３　中学校第３学年の通信

4月　「いよいよ受験の年だ」という言葉をこの時期の作文に書いてくる。家庭でも大きなプレッシ

ャーを感じ、保護者も不安を感じている。心の安定と目標に向かってみんなでスクラムを組んで進もう、と働きかける教師の力は大きく作用する。生徒、保護者、教師の相互理解と連係プレーが進路決定へ向けて大きく役立つだけに通信の果たす役割は大きい。

（1）最上級生であり、全校のリーダー学年であることを自覚させ、あらゆる活動で学校生活の顔になるよう自信をもたせる。

（2）非行や問題行動について自らが考え、今の生活を見つめさせる。

（3）進路を自分で決められるよう自分の特徴を掴ませ、弱点を克服させ、自立を促す。

（4）受験生をもつ保護者と立場を越えて生徒のことを語り合え共有できるように正確な進路情報を提供する。

5月　大型連休の過ごし方は、説教じみた内容になりがちであるが、卒業生の体験談などを交える等、工夫する必要がある。修学旅行が近付いている時期でもあり、世界遺産や重要文化財等の調べ学習の状況をまとめ事前指導に生かしたい。

（1）卒業生の受験体験記、効果的な学習法、中間テスト奮戦記等を連載し、同時に学習集団としてどう「学び」に取り組むか話し合う。

（2）憲法記念日と公民の授業とをタイアップし、日本国憲法の内容やその成立過程、さらに平和について学年全体で学べるようにする。

5～6月　受験の年を迎えた最初の定期テストの時期である。全体的には意気込みが違う。生徒たちの不安な気持ちを汲み取りながらテストへの取組の反省と復習、勉強法等についてアドバイスしたい。３年生の学習と１・２年生の復習とをどう進めるか、今まで以上の困難が予想されるので、より具体的で細かな指導が求められる。また、修学旅行は中学校生活の大きな思い出の一つである。教師集団が意思統一し、実行委員とともに創りあげる行事にしたい。

（1）孤立し閉鎖的な受験体制の中で、卒業生の体験談や生徒たち自身の考えや思いを公開していくことで、共同の学びを創りあげていく。

（2）修学旅行を通して学んだことを学年全体でまとめる。班別行動や部屋での過ごし方等を話し合う中でぶつかることもあり、友情とは何かを考えさせられる場面が多くある。共に成長し合える友（仲間）としての付き合いを考えさせたい。

7月　運動部員にとっては最後の大会（総体）を迎える７月。部活はやはり中学校生活の大きな思い出の一つである。最後にかける思いや意気込みを大切にしたい。暑さゆえ、学習に集中しにくくなる時期でもあるが、卒業生の「夏休み体験談」を聞いたり高校の「一日体験学習」の計画を立てたりしながら、モチベーションを上げさせたい。

（1）激励会（壮行会）の成功へ向けての取組を通して、大会へ自信をもって臨めるようにする。

（2）なぜ「夏を制する者は受験を制する」と言われるのか、具体的な学習法をアドバイスしながら話し合わせたい。

（3）保護者会、夏休み中の「三者面談」は、保護者と連携を密にする絶好の機会である。生徒たちの好奇心、進路に対する意欲を生かし、主体的な学びになるよう保護者と協力して進める。

（4）公民の憲法学習を兼ねて、広島・長崎の原爆記念日、終戦記念日について学ばせる。同時に、戦争文学など読書指導にも生かせるよう教師の愛読書を紹介したい。

9月　運動部の生徒は部活から引退する。しかし、運動会や文化祭ではまだ現役、リーダー格の学年である。受験へ向けての情報発信ばかりの通信では、お知らせや説教が多くなり、読まれない。９月は、行事を通して学校のリーダーとしての自覚を促したり、クラスの連帯・団結を訴えたりして、潤いのある通信にしたい。もちろん、最大の関心事である進路についての的確なアドバイスは怠ることのないようにしたい。

（1）ともするとバラバラになりがちな学級、学年である。行事を通してどのような力を身に付けることが必要なのかを提示し、リーダーとしての自覚と誇りを再認識させ、３年生のもつパワーを引きだしエネルギーを燃焼させたい。

（2）進路に関するアンケート等は、そのねらいや利用について詳しく説明する。なぜ高校へ行くのか、将来どんな職業に就きたいのか、親はどうしてその職業を選んだのかなど、多くの人の協力を得て、連載したり、特集を組んでみる。

10月　受験勉強が順調に進んでいる生徒とそうでない生徒に分かれ、「自分だけよければ」という気持ちになりがちな時期である。一方で最後の文化祭（学校祭）、合唱コンクールに向け、クラスの団結を呼びかける生徒も存在し葛藤が起きる。受験があるからこそ、皆で協力し合う大切さを考えさせたい。

（1）合唱の面白さ、奥深さ、クラスの団結の大切さ、受験勉強が思うように進まない現実などを話し合わせたい。心に染み入るように呼びかけ、生徒の内面に迫る。

（2）種々のテストが実施される時期であり、効果的勉強法を特集しても、努力の結果がすぐには表れないこともある。「受験」という障壁に、皆がどうスクラムを組んで立ち向かうかなどを考えたり、働きかけをしたりしていく。

（3）高校説明会のねらい、高校調べと選択、保護者の啓発等、具体的で正確な情報を伝え、適切なアドバイスをする。この時期の情報提供は重要であり、通信の内容は説明や情報提供が主になるがやむを得ない。

11 月　最後の思い出づくり＝文化祭(学校祭)が終わり、生徒のテンションが下がり始める。進路選択の資料提供は、より具体的で詳細な内容のものにする。テスト結果や進路情報が、偏差値や順位、見栄だけで受験校を選んでしまう弊害、問題点に触れる。「文化」、「進路」、「学び」の３本柱について考える絶好の時期でもある。

（1）文化祭を振り返り、成果と課題を学年全体で評価し合い、自信と誇りをつけるようにする。

（2）期末テストという短期的目標、さらに中期的、長期的目標を再確認し、目的のある「学び」に学年全体で取り組む。そのプロセスや結果も伝える。

12 月　三者面談が終わり進路決定の大詰めを迎える。「師走」の言葉は、まさに３年生とその担任に当てはまる。個人の問題としての「進路選択」と「みんなが同じような状況におかれている＝仲間たちの連帯と励まし合い」という集団の問題を、同時に学級・学年づくりのなかで取り組む。その課題を教師集団は背負いながら、受験前の煩雑な事務処理と生徒たちの心のケアにあたらなければならない。

（1）私立高入学願書提出を目前にして、その書き方にも保護者は不安を抱えがちで、それは生徒にも伝わる。面談から受験料振込等に至るまで、家庭の緊張感や不安を解消するようなアドバイスに心懸ける。

（2）受験に対して親子ともども精神的な疲れが出る時期でもある。通信には種々のプレッシャーを和らげる励ましや先輩たちの体験談等を連載したい。生徒たちの内面に共感しつつ、あまり頑張りすぎないことも大切であることを伝えたい。

１月　私立高校のなかに年明け早々に入試がある場合があり、正月気分を味わえない生徒も多い。このような中で進学か就職かの選択、公立高の受験校選択、全日制か定時制か、進路選択そのものに背を向ける生徒など、選択の幅は広く悩みは多い。教師は日常の授業や生活指導以外に、願書記入のチェックから調査書作成、受験学力に応じた過去の入試問題のワークシート作成等の受験対策、事務処理に追われることになる。生徒たちの悩みに寄り添いたいと思っていても、そうした時間を確保できず、空しさを感じることもある。この時期の教師は超多忙で、いつ倒れてもおかしくないと感じることもある。率直に保護者への協力を得ることも必要である。

（1）３か月先の自分を想像し、進路決定へ向けての決意を新たにさせる。

（2）進路情報は絶えず提供し、教師側が選択の幅を常に広げておく。書類提出締め切り日等、入試日程関係事項は常に生徒に把握させる。

（3）新聞の切り抜きを利用するなど公民の授業と連携し、社会の出来事、若者の就職状況等、広い視野で現実社会の出来事を見つめさせる。

２月　進路が決定した者、これから不安な受験を待つ者、まだ迷っている者、現実から目を背ける者、バレンタインに心を奪われる者など、クラスには様々な思いをもった生徒がいる。この様々な姿が混在している集団をどうまとめるか、教師集団の腕の見せ所である。教師としての率直な思いを語っていくことも大切である。卒業文集づくりでは、生誕時・幼児期の自分の様子など、自分史づくりをし15年間の歩み、成長をしっかり振り返らせたい。それには、保護者の協力が不可欠になる。

（1）受験前にあまり不安を煽らず、言葉少なにアドバイスをする。３年生のこの時期は、教師の思いを意外に受け止めてくれるものだ。

（2）受験や入学の手続きに関する通知は、事務的なことではあるが、この時期には重要であり、その内容に保護者も生徒も安心することすらある。

（3）卒業へ向けての準備も進行する。３年間の総決算となるべき「卒業文集」をどう創りあげるか。クラス文化、学年文化の創造を話し合わせ、文集づくりに励ませたい。

３月　３月に入ると県立高入試と卒業式がわずか10日間ほどで行われる。実際には、思い出づくりや文集づくりも２月までに完了させておかないと、

３月はほとんど何もできず卒業式を迎えてしまう。つまり３年生に３月はないに等しい。一方、なかなか進路が決まらずに悩む生徒も存在する。どの生徒にも細かい配慮を心がけなければならない。

（１）３学期から始めた「自分史づくり」で、家族に取材した様子を伝え、相互に参考にさせたい。文集とは異なる「学び」を経験させたい。

（２）有終の美を飾って卒業の日を迎えようとする意識を、生徒一人一人にもたせる。同時に、保護者と教師が互いに生徒たちの成長を喜び合い、別れを惜しむ関係をつくり、生徒の成長を祝いたい。人間的な感動が溢れる紙面にしたい。

（３）生徒一人一人に、「贈る言葉」を掲載する。３年間の締めくくりに相応しいものとなるようにし、最後のメッセージを伝える。

4　生徒・卒業生や保護者の反応

こうした通信発行に関して、生徒、卒業生、保護者は、次のように話してくれた。

生徒たちは、「定期テスト前の先生のアドバイスがまとめられていてよかった。」、「作文が苦手でなかなか書き始められなかった、何度も書かされているうちに最近はすぐに書けるようになり、少し得意になったかも。友達の作文を読むのも参考になる。」などと感想を述べる。卒業後、社会人になってから「あの時に書かれていたことが、今になって分かってきました。」と同窓会で語る者もいる。

保護者は、「先生、あの『がんばろう』は助かる。息子と話すきっかけになる。」、「学校で、どんなことをしてるのかよくわかるようになってきた。今の中学生の気持ちって、こんな感じなんですね。」、「『学力』というものについて、先生方の考えが少し分かったような気がします。」、「１年間の『がんばろう』をファイルして大切に保管し、時々読んでいます。生徒の成長が感じられる１冊で、我が家の宝物にします。」と話してくれ、感謝の声も多い。

5　おわりに

筆者が通信を発行し始めたのは 1986 年４月であった。以来 25 年以上書き続けてきたことになる。続けてこられた要因を考えれば、次のようになる。

（１）自分の気持ち、生徒のつぶやきを伝えたいという強い思いがあった。生徒たちが読み、保護者も読んでくれる。それが「書く」意欲を何よりも高めてくれる。自分のために書いた通信が生徒や保護者に喜ばれて、単純に嬉しかった。

（２）時間をかけすぎないこと。かつては自宅で手書きで通信を書いていた。大きなペンケースに、水性ペン(細字)や筆ペン、修正液、ハサミ、イラスト集(含生徒の作品)、定規等、通信発行活動の必需品を入れ、その日を回想したり、メモを見たて 30 分～１時間以内で書き上げてきた。手書きからパソコンの時代へ移行し書きやすくなった。1997 年からパソコンを使って作成するようになり、いつでもどこでも作れるようになってきた。データを残しやすく、訂正もしやすい。写真も手軽に入れることができ、読者の関心をより一層高めることができるようになった。

（３）速報性を重視してきた。大切な出来事は速報的に知らせることが重要である。その日の出来事は遅くとも翌日に知らせたい、という思いが日刊に近い通信を発行させた。生徒の誕生日には必ず発行し、クラスの皆で祝福した。生命の誕生を皆で喜び合うことを大切にしたかった。

（４）誰もがすぐに読める紙面づくりに心懸けた。読者の対象は生徒、保護者、そして教師たちであった。誰もが３～４分で読めて、しかも読者を限定しない紙面づくりに心懸けた。堅い内容だけでなく、教師の「遊び」の部分も入れてきた。

付記：「１」は丸山が執筆した。「２」から「５」は平野が執筆し、丸山が修正を施した。

参考文献

[1] 太郎良信「学級通信の歴史　―その素描」『教育』第 556 号、1992 年、15-24 ページ。

[2] 大日方真史「教師・保護者間対話の成立と公共性の再構築　――学級通信の事例研究を通じて――」『教育学研究』第 75 巻第 4 号、2008 年、27-38 ページ。